

# 食寝遊備

[ くらねるあそび ]

[ kuu-neru-aso-bi ]



## キャンピングカーは、あらゆる「遊び」とリンクする魔法のアイテム

キャンピングカーほど、さまざまな遊びをサポートするアイテムはほかにない。

たとえば、釣り。  
サーフィン。  
スキー・スノーボード。  
バイク競技・サイクリング。  
ハイキング・軽登山。  
天体観測・天体撮影。  
バードウォッチング……

もちろん、温泉めぐり、グルメスポットめぐりは、多くのユーザーの共通した楽しみとなっている。

このように、キャンピングカーをどう活用しようと、それはユーザーの気持ちのおもむくままにいいのだが、もし、キャンピングカーに付いている機能をいちばん手っ取り早く試してみたり、またその機能を最大限に生か

そうと思うのだったら、まずキャンプ場に行ってみてみる。それがキャンピングカー遊びの原点。

キャンプ場は、決して単なる「キャンプする場所」ではないのだ。キャンピングカーの機能をもっとも有効に、かつ楽しく引き出す場所といっている。

### キャンピング機能を最大限生かすなら、やっぱりキャンプ場泊

キャンプ場が、キャンピングカー泊に向いている理由は、まずそれが、法的にも社会常識的にも認められている「宿泊施設」だからである。

道の駅や、高速道路のサービスエリア・パーキングエリアは、あくまでも「休憩施設」。もちろん疲れを癒すための仮眠は認められて

いるものの、そこで「宿泊してもいい」ということは明文化されていない。

### キャンプ場泊の最大のメリットは電源確保

「宿泊施設」と「休憩施設」とでは、そこで受けられるサービスそのものが違ってくる。

まず、キャンピングカーの機能を十分に生かすためには、電気の供給が大切になる。キャンプ場では、たいてい100ボルトのAC電源サービスを受けられるので、電気の供給が滞る心配から解放される。

もちろん、一晩過ごすくらいならAC電源の供給のないところでも、走行充電によってサブバッテリーに貯められた電気で、室内の照明、テレビ、冷蔵庫、あるいはFFヒーターくらいは十分賄える。

しかし、バッテリーが弱っているときや、ま

た走行充電がままならなかったときなどには不安が残る。キャンプ場泊の大きなメリットは、まず電源が確保されることにある。

### キャンプ場のように水場が確保される場所はほかにない

次に、水場の確保。キャンピングカーにはたいてい流しが付いており、車内に取り付けた水タンクを通じて水を使うようになっているが、この水タンクに補充する水の確保がキャンプ場以外では難しい。

同様に、車内で食事したときに汚れた皿やコップを洗う場所も、キャンプ場以外で見つけるのは難しい。それらのことを、道の駅やサービスエリアなどで行ったりすると、他の利用者が快く思わないからだ。しかし、キャンプ場には、水の補給や食器洗いをを行うのに適した施設がすべて整っているので、とても安心だ。

### ゴミ処理・トイレ処理もキャンプ場なら安心

ゴミの処理においても、キャンプ場なら簡単。近年ますます道の駅やサービスエリアのゴミ捨て場に「家庭ゴミ」を捨てることに対する監視の目が厳しくなってきた。

しかし、キャンプ場なら、キャンブルしたときに発生したゴミを捨てる場所がしっかり定められているので、そこに捨てておけば大丈夫だ。

カセットトイレやポータブルトイレを持つキャンピングカーも増えてきたが、便利な反面、

その汚物処理に困る人も多い。これもキャンプ場ならば、汚物タンクをトイレで処理することに関しても理解が得やすい。なかには、カセットタンク専用の処理場所を設けているキャンプ場さえある。

また、アメリカ車のトイレタンクは日本車とは少し違った構造になっているが、そういう特殊なトイレタンクに対応した処理施設(ダンプステーション)を持っているキャンプ場も多い。

### 「安全」と「安心」が確保されるキャンプ場泊

もうひとつ、キャンプ場泊のメリットは、「安全」と「安心」の確保にある。

もちろん、日本の治安の良さは世界でもトップレベルにあるから、戸外でキャンピングカー泊をしていたときに何かの犯罪に巻き込まれたという例は、ほとんど聞かない。

しかし、それでも「何か起こるかも…」という不安だけは解消されない。

その点、キャンプ場は、管理人が常駐することが多く、夜間はゲートなどでクローズされることが多いため、セキュリティが確保される。キャンプ場に用のない車両が進入してくることもないので、場内にいる限り、小さなお子さんやペットが事故に巻き込まれることもないし、夜間は安眠が保証される。

### ファミリーで楽しむメニューが豊富

キャンプ場は、小さなお子さんがいらっしやるファミリーに向けた宿泊場所である。なぜなら、そもそも日本のキャンプ場が「家族

のレジャー」を想定してつくられた施設だからだ。欧米では、キャンプ場利用者の主流はシニア夫婦となるが、日本のキャンプ場は、子供のいる家族を中心に企画され、発達してきた。

だから、ほとんどのキャンプ場には、子供用遊具施設がそろっており、また夏休みなどには、各キャンプ場が独自に考案した子供向けイベントが集中して続く。なかでも昆虫採集や星座観察、お絵描き教室、クラフトワークなどは、どのキャンプ場でも定番メニューとなっている。

また、場内施設の設計や構造も、小さなお子さん目線で企画されているものが多く、子供たちが安心してアウトドアに興じられる環境が整えられている。





# 食寝備遊

[くうねるあそび]  
kui-neru-aso-bi

## 「道の駅」を回る醍醐味のひとは、新鮮な地元食材に触れること



地元の新鮮な野菜がふんだんに並べられる「よしおか温泉」物産コーナー

キャンピングカー旅行における「道の駅」というのは、いわば、ラクダの背に乗って砂漠を旅する商人たちのオアシスのようなもの。身体から抜けた水分、食料を補給する場であると同時に心身の疲れを癒し、次の旅に備えて鋭気を養う場所だ。

そして、そこはまた、観光情報や道路交通情報などを効率よく入手するインフォメーションスポットでもある。

近年、このような休憩・情報発信機能に加え、利用者に、地域の新鮮な食材や料理を提供しようという動きが顕著になってきた。

これは、日本に限らず、いま世界的な流れとなっている「スローフード運動」や、「地産地消」といった地域限定の伝統食材の復活運動とも連動している。つまり、1960年代以降、世界中を巻き込んでいったファーストフード文化への見直しというテーマともリンクしているといえそうだ。

ファーストフードは、確かに手軽に、しかも場所を選ばず、どこでも同じレベルの味が楽しめる。しかし、反面いつも同じ味と同じサービスが供給されるため、旅の途中に食べ続けていると、旅をした実感も薄くなる。

そういうとき、「道の駅」の特産品コーナーに集まってくる地元食材は、買って食べれば新発見があるだけでなく、旅する醍醐味を教えてくれる。

とにかく、このような動きが顕著になってきたおかげで、「道の駅」利用者は、今まで中央の流通に乗ることのなかった各地の珍しい食材、隠れた美味を、ドライブの途中で発見することができるようになった。

このような地元食材をおみやげとして買って帰るときにも、キャンピングカーは便利。冷蔵庫を常備している車種も多く、物の保管にも困らない。また、物を収納するスペースにも余裕があるので、アイスボックスや保冷庫を積むことも簡単。もちろん、キャンプ場に泊まって、その日のうちにキャンプ料理として使うという手もある。

### 新鮮素材の農作物が人気 「道の駅よしおか温泉」

特産品コーナーが充実している「道の駅」の代表が、群馬県吉岡町にある「道の駅よしおか温泉」である。



肉類、魚介類も豊富

ここでは、「かざぐるま」という物産館があって、地元の新鮮な農作物が手に入ると評判だ。名物の上州麦豚のほかにも、近隣の畑で採れたナス、キュウリ、トマト、トウモロコシなどの農作物のほか、新鮮なイカ、マグロなどの刺身や干物、タラコ、うなぎなどの海産物も並べられている。特に、北海道・十勝の大樹町漁港から直送される鮮度の高い魚介類は、この海産物コーナーの目玉になっている。

この物産館の扱う品目が豊富なのは、観光客をターゲットに品揃えしているだけでなく、地元住民に食材を供給する目的もあるからだという。近隣に住む人々は、ここで温泉を楽しみ、そのついでに食材を買って自宅に帰る。まさに、地元の生活に密着した道の駅なのだ。

だから、自然と地元の人たちとの交流も生まれる。それこそキャンピングカーの旅ならではのコミュニケーションを楽しめる。

この「よしおか温泉」(リバートピア吉岡)



足湯を楽しむ観光客

目の前にゴルフ場が広がる「よしおか温泉」のレストラン

は、温泉の泉質も評判。地下1300メートルの地盤から湧き出る高温アルカリ天然温泉で、慢性皮膚炎、神経痛などに絶大な効果を発揮する。

ちょっとだけ休憩したいという人のために、足湯も用意されているので、旅を急ぐ人は、この足湯に浸かるだけでも「温泉気分」が味わえる。

施設の前は、目も鮮やかなグリーンが広がるゴルフ場。ケイマンゴルフ、パークゴルフ、グランドゴルフが楽しめる。ゴルフ場と温泉館の前にはサイクリングロードが続き、さらには、乗馬クラブも近い。

温泉、食事、地元食材、サイクリング、ゴルフなど、さまざまな楽しみが効率よく味わえる「よしおか温泉」。北関東を旅するときは、ぜひ寄ってみたい。

関越自動車道の「渋川伊香保インター」から5km。クルマで約8分。風力発電のために造られた大きな風車が目印。

## くるま旅のマナー

キャンピングカーで旅行するときは、やはり人の迷惑にならないような心がけが必要。マナーを守ることによって、地元の人々や旅の仲間との交流が生まれる。マナーを守って、楽しいくるま旅を。

- 1 道の駅や高速道路のSAやPAなどの公共の駐車場では、連泊、長期滞在を行わない。
- 2 キャンプ場以外の公共駐車場で休憩をとるときは、オーニングを広げたり、椅子やテーブル、バーナーなどを車外に持ち出して使わない。
- 3 公共駐車場の洗面所などで食器や食材を洗ったり、そこから電源を引いてキャンピングカーに接続したりしない。
- 4 旅行中や移動中に発生した大量の生活ゴミを、公共駐車場のゴミ箱などに投棄しない。
- 5 カセットトイレやポータブルトイレの処理は主に、キャンプ場か自宅。また、公共駐車場の水道設備を利用した給水はできるかぎり控える。
- 6 生活排水用のグレータンクの汚水をその場に垂れ流したり、側溝に捨てたりしない。
- 7 公共駐車場におけるジェネレーター(発電機)の使用は、他の利用客が休憩していたり、近所に民家があるような場所では控える。
- 8 オフ会やクラブミーティングで公共駐車場に集合する場合は、騒音に注意。
- 9 道の駅や高速道路のSA・PAにある椅子マークの駐車場には、健常者のみが乗車しているときは駐車しない。
- 10 無駄なアイドリングによる排気ガスの流出や騒音は避ける。

### Information

道の駅「よしおか温泉」 群馬県北群馬郡吉岡町漆原2004 ☎ 0279-54-1221

営業時間/休館日

○ クラブハウス・案内所棟 8:30~17:00 (毎月15日、15日が土日祝の場合は翌日または翌々日、年末年始は休館)

○ 温泉館 10:00~21:00 (毎月15日および奇数月の15~16日は休館、15日が土日祝の場合はその翌日か前日、詳しくは問合せを)

○ 物産館 9:00~19:00 (年中無休)





## キャンピングカーで ライフラインを持つクルマの頼もしさを実感

武石泰幸さん／武石優子さん

# キャンピングカーで震災を乗り切る

昨年の3・11東日本大震災では、多くの被災者が津波や地震で家を失う経験をした。そういう方々のために、仮設住宅の建設も進められたが、その対応が迅速かつ適切に行われたわけではなかった。エリアによっては、仮設住宅の供給が遅れた場所もあったからである。しかし、キャンピングカーを所有していたために、仮設住宅に入居するまでライフラインを確保しながら自活できた人々もいた。

仙台市・宮城野区の仮設住宅で暮らしている武石泰幸さん(28歳)と、その奥様の優子さんがその例。若いお二人が、約一ヶ月の間、キャンピングカーを使ってどのような生活をされていたのか、ご夫婦から直にお話をうかがった。

武石さんのご主人が津波に襲われたのは、会社の近くの海沿いの道を、営業車で走っていたとき。「ふと、海側を見ると、盛り上がった波の上で、たくさんクルマが踊るように追ってくるのが見えた」という。逃れようとしても、すでに渋滞でクルマが動かない。

武石さんは、急いでクルマを乗り捨て、波の反対側に向かって走った。

「幸い、知らない整備工場の前を走っていたとき、そこの方が親切にも“こっちへ来い”と手招きしてくださったんです」それで、整備工場の2階まで緊急避難。1階は水で被われたが、2階まで及ぶことはなく、なんとか一命をとりとめた。

奥様の優子さんも、やはり海辺の会社に勤務していた。津波が襲ってくるのを見て、みな建物の屋上まで駆け上がった。まもなく、濁流が道路を埋め尽くし、激しい奔流が会社の1階まで流れ込んできた。幸いなことに、

水は屋上までは及ばなかったが、代わりに、まったくの陸の孤島になってしまった。翌朝になって、自衛隊に救助されるまでは、寒さと不安で寝られなかったという。

しばらく、携帯電話も通じなかったので、ご夫婦とも、お互いの安否を確認することができない。水が引いて歩けるようになるまで、ともに不安な日々を過ごした。

4日目に、ようやく電話が繋がった。

サーフィンが趣味の武石さんは、知り合いのサーフショップに身を寄せていた。親族の家に避難していた優子さんは、サーフショップまで歩き、ようやくお互いの無事を確認することができた。

しかし、家は失われていた。

武石さんは住んでいたアパートを流され、優子さんは両親の住んでいる実家を失った。

「どこで暮らそうか」そう相談し合ったが、答えは簡単に出た。お二人は、キャンピングカーを持っていたのである。ガス設備を持ち、水タンク、トイレ、ベッドが完備した小型キャブコン。サーフィンを楽しむために海岸で宿泊したり、キャンプにもよく出かけていたので、使い勝手は分かっている。避難所に入るよりも、プライバシーが確保できるというメリットも享受できる。

運もよかった。

もし、いつものように、住んでいるアパートのそばにキャンピングカーを停めていたら、あっけなく水に流されていただろう、という。ところが、たまたま車検を受けるために、いつも世話になっているキャンピングカーショップにクルマを出していたところだったのだ。

二人のキャンピングカー暮らしが始まる。

いちばん助かったのは、飲料水や生活用水をプールできる清水タンクを備えていたこと。オリジナルのタンク容量は、50リットルだったが、前オーナーが94リッターまで増設していたので、ボイラーを焚いて温水シャワーを浴びるのも楽しかった。サーフィンを楽しむには、シャワーは必需品。そう考えていた武石さんは、とにかく水タンクの容量が大きいことが、購入するときの必須条件だった。そのことにこだわったことが、震災を乗り切るために役立つことになった。ただし、近辺の水道が止まっているので、水の補充が大変。

ガソリンの供給が途絶えていたので、むやみにクルマを動かすわけにもいかない。仕方なく、自転車にポリタンクを積み、水道が機能していた公園まで出向いて、水を補充したという。

電気の供給も止まっていたので、電源の確保も課題だった。しかし、ルーフにソーラーパネルを積んでいたことが幸いした。それによって蓄えた電気は、夜は照明とFFヒーターを作動させた。

ガスはプロパンボンベ。もちろん、使いきってしまうと、その補充はなかなかやっかいだ。

ところが、旦那さんの勤める職場がライフラインに関係する会社だったので、プロパンガスの充填にも心配がなかった。

ダイネットテーブルをベッドメイクして、サイドソファにつなげれば、そのままオールフルフラットな就寝スペースも誕生。ベッドの寝心地がいいため、深い睡眠を確保することもできて、それが仕事の疲れ癒すのに役立った。また、個室トイレがあるので、寒い夜でも、いちいち外に出る必要がなかった。

家を失うという悲劇を味わうことになったが、キャンピングカーがあったために、生活

する場所は確保できた。キャンピングカーを持っていたことのありがたみが、今までは違った形で実感できたという。

仲間もいた。

武石さん夫妻が世話になったサーフショップのオーナー家族も、同じようにキャンピングカーを持っていたのだ。

寝るときは、敷地内に停めた2台のキャンピングカーにそれぞれ別れ、「おやすみ」の挨拶を交わし合って休む暮らしが続いた。

日々の食事はどうしていたのか。

「そのサーフショップのオーナーが親切な方だったので、食事はその家族の方々と一緒にとることができました」と、武石さん。

最初のうちは、食材も十分に出回ってなかった。「オーナーが備蓄していた米を分けていただいて、一緒に食べたり、あとは缶詰を開けたり…。お米だけ食べても、こんなおいしいものだとはじめて知りました」と、武石さんは、当時を思い出して笑う。

そのうち、少しずつ食糧も流通するようになり、近所の小学校などで配給も始まった。

サーフショップとの付き合いがあるサーフボードメーカーが、いちはやくいろいろな物資を届けてくれたこともありがたかったという。

現在、武石夫妻は、宮城野区に建てられた仮設住宅で暮らしている。被災直後に「家」替わりに使ったキャンピングカーは、再び、ご夫婦でサーフィンやキャンプを楽しむためのツールに戻った。

「たぶん、もうキャンピングカーから離れた生活はできないでしょうね。いざというときに、これだけ役に立つ道具になることも分かったし、サーフィンやキャンプに使えば、震災の辛さを忘れさせてくれる楽しいアイテムになることも理解できましたから」

ご夫婦ともそう語る。

まさに、JRVAがキャンピングカーライフの標語として提唱する「食、寝、遊、備（くうねるあそび）」を完璧にまっとうした例のひとつであるかと思う。



# 食寝遊 備

[くうねるあそび]  
kuu-neru-aso-bi





照明、エアコン、テレビなどの電気器具が使えるキャンピングカーの室内



本格的な固定コンロを備えたものから、卓上コンロを置いただけのものなど、コンロもさまざま



電磁調理器を採用する車種も増えている

ボリタンの清水タンクと排水タンク

# つ ま り キ ャ ン ピ ン グ カ ー は 「 動 く 家 」

## 食 寝 遊 備

[ くうねるあそび ]  
kuu-neru-aso-bi

キャンピングカーは基本的に「プチハウス」である。つまり、「家」とほぼ同様のライフラインを整えた乗り物である。もちろんその充実度は、車種や価格帯によって異なり、中にはライフラインの一部しか整備されていないものもあるが、基本的には冷暖房、電気、水道、ガスなどの設備を最初から搭載しているか、もしくは注文によって取り付けすることができる。

家庭と同じように、  
照明、テレビ、冷蔵庫などが使える電気

キャンピングカーは、ベース車のエンジンを切った後でも、室内を照明で明るくしたり、テレビを見たり、冷蔵庫を使ったりすることができる。

このようなことが可能となるのは、キャンピングカーの場合は、自動車用のバッテリーとは別に、室内の電気製品を使うためのサブバッテリーというものを搭載しているからだ。

サブバッテリーは普通に走行していれば自然に充電できるようになっているが、走行

せずに長期間同じ場所に滞在していると、蓄電量がそのうち減ってしまう。

それを補う方法として、発電機やソーラーシステムなどが普及している。ただ、発電機は音が発生するため、使える場所が限られてくるし、ソーラーは現状の蓄電効率では、いまだ補助電源の域をでない。

今のところ、宿泊中に安定して電気を供給してもらえるのは、キャンプ場が用意しているAC電源設備である。

コンロやボイラーを動作させるガス設備

キャンピングカーに搭載されているコンロには、カセットガスを熱源とする簡易的な卓上コンロから、プロパンガスを利用して本格的な調理が可能な大型コンロまでさまざまな種類がある。ボイラーを搭載している車種なら、さらにプロパンから引いたガスなどを使って温水をつくることもできる。

また、冷凍食品やレトルト食品を中心に調理メニューを考えるならば、電子レンジを用

意しておけばコンロの補助として役に立つ。近年は、ガスに代わって電磁調理器を採用する車種も出ている。

上下水道も完備

ほとんどのキャンピングカーには、シンク（流し）と蛇口が付いており、清水タンクから汲み出した水で、手や顔を洗ったり、簡単な洗い物ができる。使った水は、今度は排水タンクに流され、溜まったら適宜オーナーが捨てるようになっている。

清水タンクの容量は車種によってさまざま。10リッタークラスの小型のものから、100リッターを超えるタンクを備えるものもある。シャワーなどを使いたいときは、当然タンクの容量が大きい方が便利だが、走っているときは、その分重量が増えることも意識しておいた方がいい。

トイレは便利だが、清掃はオーナーの役目

トイレに関しては、オーナーの好みが分かれる。「絶対必要だ」という人から、「トイレス

ペースよりも、就寝スペースや収納スペースを優先すべきだ」という人まで千差万別。

しかし、昨年の震災後、家が倒壊したり流されたりして、「家のトイレが使えなくなった」という声も多く聞かれたことから、トイレのついたキャンピングカーへの関心が高まっている。

国産車では、固定便座を持つカセット式と、トイレ自体を持ち運び出来るポータブル式という二つのタイプが普及しているが、いずれも汚物が溜まったときは、オーナー自身が家庭のトイレなどに廃棄して、自分で清掃しなければならない。

最初はそれを面倒に思う人も多いが、慣れてしまった人は、口々に「トイレは必需品」だと語る。

エアコン、ヒーターなど  
空調設備はみな快適

キャンピングカーは断熱処理を施されたボディで構成されているため、乗用車に比べると外気温に左右されず、比較的暑さ・寒さをしのぎやすい。しかし、それでも高温

多湿の日本の夏には、エアコンがあった方が快適なのは事実。

そのため、キャンピングカーには、運転席周りを冷やすカーエアコンとは別に、室内専用のエアコンが用意されている。通常は、ルーフエアコンやウインドウエアコンが主となるが、近年は家庭用エアコンを取り付けた車種も増えている。

いずれもAC電源で駆動させるため、外部100V電源につながるか、発電機を使う必要がある。また、複数のサブバッテリーとインバーターを組み合わせることでエアコンを駆動させるモデルも出現している。

暖房に関しても、ベース車のヒーターとは別に、車内専用の暖房機器が普及している。もっともポピュラーなものは「FFヒーター」と呼ばれるもの。これは、ガソリンや軽油など、ベース車の燃料をそのまま使用するヒーターで、燃料タンクを満タンにしておけば、いつでも心配なく使えるという便利なもの。エンジンを切った状態で使えるので、脱・騒音、脱・排ガスに貢献し、環境保全にも適している。

FFヒーターとは別に、LPGを使うガスヒーターも、静粛性の面で人気がある。



電子レンジもキャンピングカーの人気装備のひとつ



キャブコンに多いカセット式トイレ



持ち運びが便利なポータブルトイレ



エアコンもキャンピングカーの人気装備のひとつ